

二〇二〇年度入学試験問題 国語（五十分）

二月二日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は17ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙だけでなく問題冊子も集めます。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「ひきがしどいね」

とMがいました。本当にその通りでした。ひきとは、水が沖の方にひいて行く時の力のことです。それがその日は大変強いように私たちは思ったのです。くるぶしくらいまでより水の来ない所に立っていても、その水がひいてゆく時にはまるで急な河の流れのようで、A ものですから、うつかりしていると倒れそうになる位でした。その水の沖の方に動くのを見てみると目がふらふらしました。けれどもそれが私たちには面白くってならなかったのです。足の裏をくすむるように砂が掘ほれて足がどんどん深くうずまってゆくのがこの上なく面白かったのです。三人は手をつないだまま少しづつ深い方にはいつてゆきました。沖の方を向いて立っていると、ひぎの所で足がくの字に曲りそうになります。陸の方を向いていると向こうずねにあたる水が痛い位でした。両足をそろえてまっすぐに立ったままどっちにも倒れないのを勝ちにして見たり、片足で立ちっこをして見たりして、三人は面白がってI はね回りました。

そのうちにMがひぎぐらいの深さの所まで行って見ました。そうするとうねりが来るたびごとにMは背のびをしなければならぬほどでした。それがまた面白そうなので私たちもだんだん深みに進んでゆきました。そして私たちはとうとう波のない時には腰こしぐらいまで水につかるほどの深みに出てしまいました。そこまで行くと波が来たらただ立っていたままでは追いつきません。どうしてもふわりと浮うき上らなければ水を飲ませられてしまうのです。

ふわりと浮き上がると私たちは大変高い所に来たように思いました。波が行ってしまふので地面に足をつけると海岸の方を見ても海岸は見えずに波の背中だけが見えるのでした。その中にその波がざぶんとくだけます。波打ちぎわが一面に白くなって、いきなり砂山や妹の帽子ぼうしなどがB 見えます。それがまたこの上なく面白かったのです。私たち三人は土用波があぶないということも何も忘れてしまつて波越こしの遊びを続けさまにやっていました。

「あら大きな波が来てよ」

と沖の方を見ていた妹が少しこわそうな声でこういきなりいきましたので、私たちも思わずその方を見ると、妹の言葉通りに、これまでのとはかけはなれて大きな波が、両手をひろげるような格好でおし寄せて来るのでした。泳ぎの上手なMも少し気味悪

そうに陸の方を向いていくらかでも浅い所までにげようとしたくらいでした。^① 私たちはいうまでもありません。腰から上をのめるように前に出して、両手をまたその前につき出して泳ぐような格好をしながら歩こうとしたのですが、なにしろひきがひどいので、足を上げることも前にやることも思うようには出来ません。私たちはまるで夢の中で怖いやつに追いかけられている時のような気がしました。

後ろからおし寄せて来る波は私たちが浅い所まで行くのを待っていてはくれません。見る見る大きく近くなって来て、そのてっぺんにはちりちりちりと白い泡あわがくだけ始めました。Mは後ろから大声をあげて、

「そんなにそっちへ行くとだめだよ、波がくだけると巻きこまれるよ。今のうちに波を越す方がいいよ」

といました。^② X。私と妹とは立ちどまって仕方なく波の来るのを待っていました。高い波がびようぶを立てつらねたようにおし寄せて来ました。私たち三人はちようどぐあいよくくだけないうちに波の背を越すことが出来ました。私たちは体をもまれるように感じながらもうまくその大波をやりすごすことだけはできたのでした。三人はようやく安心して泳ぎながら顔を見合せてにこにこしました。そして波が行ってしまうと三人ながら泳ぎをやめてもとのように底の砂の上に立とうとしました。

Y、私たちは泳ぎをやめるといっしょに、三人ながらずぼりと水の中にくぐってしまいました。水の中にくぐって足は砂にはつかないのです。私たちは驚おどろきました。あわてました。そしていっしょけんめにめんかきをして、ようやく水の上に顔だけ出すことが出来ました。その時私たち三人がたがいに見合せた目といったら、顔といったらありません。顔は真青でした。目は飛び出しそうに見開いていました。今の波一つでどこか深い所に流されたのだということ私たちがいい合わせないでも知ることができたのです。いい合わせないでも私たちは陸の方を目がけて泳げるだけ泳がなければならないということがわかったのです。

三人はだまっただままで体を横にして泳ぎはじめました。けれども私たちにどれほどの力があつたかを考えてみて下さい。Mは十四でした。私は十三でした。妹は十一でした。Mは毎年学校の水泳部に行っていたので、とにかくあたり前に泳ぐことを知っていました。私は横のし泳ぎを少しと、水の上にあお向けに浮くことを覚えたばかりです。妹はようやく板を離はなれて二、三間泳ぐことが出来るだけなのです。

「ごらんなさい、私たちは見る見る沖の方へ沖の方へと流されているのです。私は頭を半分水の中につけて横のしでおよぎながら時々頭を上げて見ると、その度ごとに妹は沖の方へと私から離れてゆき、友達のMはまた岸の方へと私から離れて行って、しばらくののちには三人は③ようやくやく声がとどくぐらいおたがいにはなればなれになってしまいました。そして波が来るたんびに私は妹を見失ったりMを見失ったりしました。私の顔が見えると妹は後ろの方からあらん限りの声をしぼって、

「にいさん来てよ……もう沈む……苦しい」

と呼びかけるのです。実際妹は鼻の所ぐらいまで水に沈みながら声を出そうとするのですから、そのたびごとに水を飲むと見えて真青な苦しそうな顔をして私をにらみつけるように見えます。私も前に泳ぎながら心は後ろにばかり引かれました。幾度も妹のいる方へ泳いで行こうかと思いましたが、けれども私は悪い人間だったと見えて、こうなると自分の命が助かりたかったので。妹の所へ行けば、二人とも一緒に沖に流されて命がないのは知れ切っていました。私はそれが恐ろしかったのです。何しろ早く岸について漁夫にでも助けに行ってもらうほかはないと思いました。④今から思うとそれはずるい考えだったようです。

でもとにかくそう思うと私はもう後ろも向かずに無我夢中で岸の方を向いて泳ぎ出しました。力が無くなりそうになるとあお向けに水の上に臥てしばらく息をつきました。それでも岸は少しづつ近づいて来るようでした。いっしょうけんめいに……いっしょうけんめいに……、そして立ち泳ぎのようになって足を砂につけて見ようとしたら、またずぶりと頭までくぐってしまいました。私はあわてました。そしてまたいっしょうけんめいで泳ぎ出しました。

立ってみたら水がひざの所ぐらいしかない所まで泳いで来ていたのはそれからよほどたつてのことでした。ほっと安心したと思うと、もう夢中で私は泣き声を立てながら、

「助けてくれえ」

といって砂浜を駆けずり回りました。見るとMははるかむこうの方で私と同じようなことをしています。私は駆けずりまわりながらも妹の方を見ることを忘れはしませんでした。波打ぎわからずいぶん遠い所に、波にかくれたり現われたりして、かわいそうな妹の頭だけが見えていました。

浜には船もいません、漁夫もいません。その時になって私はまた水の中に飛び込んで行きたいような心持ちになりました。大事な妹を置きっぱなしにして来たのがたまたまなく悲しくなりました。

その時Mがはるかむこうから一人のわかい男の袖そでを引っぱってこつちに走って来ました。私はそれを見ると何もかも忘れてそつちの方に駆け出しました。わかい男というのは、土地の者ではありませんしうが、漁夫とも見えないような通りがかりの人で、肩かたに何かになっていました。

「早く……早く行って助けて下さい……あすこだ、あすこだ」

私は、涙なみだを流し放題に流して、じだんだをふまないばかりにせき立てて、震ふるえる手をのばして妹の頭がちよっぴり水の上に浮かんでいる方を指しました。

若い男は私の指す方を見定めていましたが、やがて手早く担おっていたものを砂の上におろし、帯をくるくると解いて、着物を一緒にその上におくと、ざぶりと波を切つて海の中にはいつて行つてくれました。

私はぶるぶる震えて泣きながら、両手の指をそろえて口の中へ押しこんで、それをぎゅっと歯でかみしめながら、その男がどんどん沖の方に遠ざかつて行くのを見送りました。私の足がどんな所に立っているのだから、寒いのだか、暑いのだか、すこしも私には分かりません。手足があるのだからないのだからそれも分かりませんでした。

抜き手を切つて行く若者の頭も段々小さくなりまして、妹とのへだたりが見る見る近よって行きました。若者の身のまわりには白い泡がきらきらと光つて、水を切つた手がぬれたまま II 海の上に現われたり隠かくれたりします。私はそんなことをいっしょうけんめいに見つめていました。

とうとう若者の頭と妹の頭とが一つになりました。私は思わず指を口の中から放して、声を立てながら水の中にはいつてゆきました。⑤けれども二人がこつちに来るののおそいことおそいこと。私はまたなんの訳もなく砂の方に飛び上りました。そしてまた海の中にはいつて行きました。どうしてもじつとして待つていることができないのです。

妹の頭は幾度も水の中にしずみましました。時にはしずみきりにしずんだのかと思うほど長く現われて来ませんでした。若者もどうかすると水の上には見えなくなりました。そうかと思うと、ぼこんとはね上るように高く水の上に現われ出ました。なんだか曲泳ぎでもしているのではないかと思われるほどでした。それでもそんなことをしているうちに、二人はだんだん岸近くになって来て、とうとうその顔までがはつきり見える位になりました。が、そこいらは打ち寄せる波がくずれるところなので、二人はもろともに幾度も白い泡のうずまきの中に姿をかくしました。やがて若者はうようにして波打ぎわにたどりつきました。妹はそ

んな浅みに来ても若者におぶさりかかっていた。私は有頂天うちやうてんになってそこまで飛んで行きました。

飛んで行って見て驚いたのは若者の姿でした。せわしく深く息をついて、体はつかれ切ったようにゆるんでへたへたになっていました。妹は私が近づいたのを見ると夢中で飛んで来ましたがふっと思いかえしたように私をよけて砂山の方を向いて駆け出しました。その時私は妹が私をうらんでいるのだなと気がついて、それは無理のないことだと思つと、この上なくさびしい気持ちになりました。

それにしても友達のMはどこに行ってしまったのだろうかと思つて、私は若者のそばに立ちながらあたりを見廻すと、はるかな砂山の所をおばあ様を助けながら駆け下りて来るのでした。妹は早くもそれを見つけてそっちに行こうとしているのだとわかりました。

⑥ それで私は少し安心して、若者の肩に手をかけて何かいおうとすると、若者はうるさそうに私の手をはらいのけて、水の寄せたり引いたりする所にすわりこんだまま、いやな顔をして胸のあたりをなでまわしています。私はなんだか言葉をかけるのさえためらわれてだまつたままつ立っていました。

「まああなたがこの子を助けて下さいましたんですね。お礼の申しようもごんせん」
すぐそばで息せき切つてしみじみといわれるおばあ様の声を私は聞きました。妹は頭からずぶぬれになったままで泣きじゃくりをしながらおばあ様にびったり抱かれています。

私たち三人はぬれたままで、着物やタオルをこわきにかかえておばあ様といっしょに家の方に帰りました。若者はようやく立ち上つて体をふいて行ってしまおうとするのをおばあ様がたつて頼んだので、だまつたまま私たちのあとからついて来ました。

家に着くともう妹のために床とこがとつてありました。妹は寝巻ねまきに着かえて寝かしつけられると、まるで夢中になってしまつて、熱を出して Ⅲ ふるえ始めました。おばあ様は気丈きじょうな方でかいがいしく世話をすますと、若者に向つて心の底からお札をいわれました。若者はいさつの言葉(注)も得言えわないような人で、ただだまつてうなずいてばかりいました。おばあ様はようやくのことでその人の住まっている所だけを聞きだすことができました。若者は麦湯を飲みながら、妹の方を心配そうに見ておじぎを二、三度して帰って行ってしまいました。

「Mさんが駆けこんで来なすつて、お前たちのことをいいなすつた時には、私は目がくらむようだったよ。おとうさんやお母さ

んから頼まれていて、お前たちが死にでもしたら、私は生きてはいられないからいっしょに死ぬつもりであの砂山をおまえ、Mさんより早く駆け上りました。でもあの人が通り合せたおかげで助かりはしたもののこわいことだったねえ、もうもう気をつけておくれでないとほんに困りますよ」

おばあ様はやがてきつとなつて私を前にすえてこうおっしゃいました。日ごろはやさしいおばあ様でしたが、その時の言葉には私も心もすくんでしまいました。すこしの間でも自分一人が助かりたいと思った私は、心の中をそこらじゅうから針でつかれるようでした。私は泣くにも泣かれないでかたくなのままこちんとおばあ様の前に下を向いてすわりつづけていました。しんしんと暑い日が縁の向こうの砂に照りつけていました。

若者の所へはおばあ様が自分でお礼に行かれました。そして何かお礼の心でおばあ様が持つて行かれたものをその人はなんといつでも受け取らなかつたそうです。

それから五、六年の間はその若者のいる所は知れていましたが、今はどこにどうしているのかわかりません。私たちのいいおばあ様はもうこの世にはおいでになりません。私の友達のMは妙みょうなことから人に殺されて死んでしまいました。妹と私ばかりが今でも生き残っています。その時の話を妹にするたんびに、あの時ばかりは兄さんを心からうらめしく思ったと妹はいつでもいいます。波が高まると妹の姿が見えなくなったその時の事を思うと、今でも私の胸は動悸どうきがして、そらおそろしい気持ちになります。

(有島武郎「おぼれかけた兄妹」より)

※出題の都合上、表記のしかたを変えたり省略したりしたところがあります。

(注) 得言わない……うまく言うことができない。

問一 A に入れることばとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 足の下の砂がどんどん掘れる

イ ひざの上まで砂がまいあがつてくる

ウ 腰のほうまで水があがつてくる

エ 水が足の裏をこっそりくすむる

問二 I Ⅲ にあてはまる最も適当なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 氷のように

イ 人魚のように

ウ 石ころのように

エ 木の葉のように

オ 飛行機が飛ぶように

カ 飛魚が飛ぶように

問三 B に入る「すぐ目の前にあるように、はつきり見えたり聞こえたりするさま」という意味の言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手に取るように

イ 手が届きそうに

ウ 目につくように

エ 目を見開くように

問四 — 線① 「私たちはいうまでもありません」とありますが、その時の「私」の気持ちを表現している一文を探し、初めの五字を抜き出して答えなさい。

問五 — 線② 「そっちへ行くとだめだよ」とありますが、「そっち」とはどちらの方向を指しますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Mのいる方

イ 妹のいる方

ウ 岸に近い方

エ 沖に近い方

問六

X

Y

にあてはまる最も適当なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ところがどうでしょう

イ あなたはご存知ですか

ウ そういわれればそうです

エ 考えてみてごらんなさい

問七

線③

「三人はようやく声がとどくくらいおたがいにはなればなれになってしまいました」とありますが、三人はなぜ「はなればなれになっ」ったのですか。十五字以内で答えなさい。

問八

線④

「今から思うとそれはずるい考えだったようです」とありますが、

(1) 「今」とはいつですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妹を見放して岸に向かって泳いでいるとき。

イ 妹が若者に助けられて浜にたどり着いたとき。

ウ 家でおばあ様にきつく叱しかられたとき。

エ 妹がおぼれてから五、六年以上経ったとき。

(2) その「考え」を「ずるい」とするのはなぜですか。二十字以内で答えなさい。

問九 — 線⑤ 「けれども二人がこっちに来るののおそいことおそいこと」とありますが、この時の「私」の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高い波がたっているなか、十一歳にもなった「妹」をおぶりながら漁夫でもない「若者」が泳いでいるので頼もしく思っている。

イ おぼれたためにしがみつく力すらも弱くなっている「妹」を抱えあげることに「若者」が手間どっていることに不満を抱いている。

ウ 「私」が「妹」と「若者」が砂浜にたどり着くのをじっと待っていることができず、二人に近づいたり離れたりして喜んでいいる。

エ 波が荒いなかで人をおぶって泳ぐのは時間がかかるうえ、「妹」が砂浜に戻ってくるのを「私」が待ちきれないでいらだっている。

問十 — 線⑥ 「私は少し安心して」とありますが、「私」が「少し安心し」たのはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

問十一 — 線⑦ 「おばあ様はようやくのことでのその人の住まっている所だけを聞きだすことができました」とありますが、「その人」の人柄の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おばあ様の意図はわかりながらも、自分の住まいを他人に知られたくないと考える疑り深い人柄。

イ 自分がしたことが立派なことであっても、脚光を浴びることを嫌う面倒くさがりな人柄。

ウ 人見知りで不器用なところがあるが、自分のしたことを恩に着せないおくゆかしい人柄。

エ 命を助けた相手とはいえ、他人との関わりを極力避け、けっして誇らない信心深い人柄。

二次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

近代をどこから見るかは諸説ありますし、日本について言うなら明治維新^{いしん}以後の西欧文明^{せいおう}の移入以降を取り扱^{あつか}わなければならぬのでしようが、ここで考えたいことは生命・人間・自然・科学技術であり、しかも私のかなり個人的な見方を語ることにありますので、戦後、とくに二〇世紀後半の、分子生物学と呼ばれる新しい生物学が誕生して以降の時代を見ていくことにします。

この時代、私たちが求めてきたものは何よりも、「便利さ」と「豊かさ」だったと言つてよいでしょう。まず、家庭の中に入ってきたのが洗濯機^{せんたくき}、電気冷蔵庫、テレビ（モノクロ）で、三種の神器と言われました。タライを使って子どもたちが汚^{よご}してきたシャツからシャツまで手洗いしていた女性にとつて、スイッチ一つで汚れを落としてくれる洗濯機は夢の道具でした。便利さの象徴^{しょうちゆう}です。冷蔵庫もしかりです。その後三種の神器は三Cと呼ばれるカラーテレビ、自動車、空調機になりました。便利さは^①ぜいたく気分へと移行したのです。

ここで言う「便利さ」「豊かさ」は物が支えてくれるものであり、物を手に入れるためのお金が豊かさの象徴となりました。便利さとは速くできること、手が抜^ぬけること、思い通りになることであり、さまざまな電化製品、自動車や新幹線などの交通手段、携帯電話^{けいたい}、その他諸々^{もろもろ}、次々と開発された機器はさらなる便利さをもたらし、それらの製品を生産する産業が活性化することで経済成長、つまり《 a 》^②が手に入りました。私たちはこのような変化を進歩と呼び、そのような社会を近代化した文明社会、つまり先進国の象徴として評価し、この方向での拡大を求めたのです。

しかし、「人間は生きものであり、自然の中にある」という切り口で見た時、この方向には大きな問題があり、見直さなければなりません。なぜなら、それが前節で述べた生きものとしての特徴と合わないところが多いからです。

速くできる、手が抜ける、思い通りにできる。日常生活の中ではとてもありがたいことですが、困ったことに、これはいずれも生きものには合いません。生きるということは時間を紡^{つむ}ぐことであり、時間を飛ばすことはまったく無意味、むしろ生きることの否定になるからです。

同じように、「手が抜ける」も気になります。手（^③）にかけるという言葉があるように、生きものに向き合う時は、それをよく見詰め相手の思いを汲^くみとり、求めていると思うことをやってあげられる時にこそ喜びを感じます。野菜造りを趣味^{しゅみ}にし

ている、ある会社の社長さんが、「肥料や水じやないんだよ。毎朝ご機嫌はどうかと声をかけてやればおいしいトマトができるんだ」と話す時の顔は、経営について語る時のそれとは違い、なんとも柔和です。日常は厳しいけれど、その底にはこのような生きものへの眼があるのだと思うと安心します。

A、戦後の日本社会は、そうした生きものへのまなざしをむしろ切り捨て、圧倒的に、便利さ、効率、自然離れた人工環境をよしとする価値観のもとに「進歩」してきました。そうした価値観のもたらした最たるものの一つが、「東京圏への一極集中」だと思えます。この異常とも言える一極集中社会は、生物が生きる場としては、大きな問題を抱えています。生物とは本来「多様」なものであるのに、この社会は《 b 》性を求めるからです。

生物多様性という言葉は環境問題との関連で語られることが多く、人間が環境を「保護する」ために守らなければならないこと、というニュアンスで受けとめられています。生物は本質的に多様であり、人間もその中の一つだということはこれまでに何度も指摘してきました。生きものの多様性は、それが暮らす場所との関わりで生まれているわけで、あるところに集中して暮らしたら一様になるのは当然です。東京への一極集中は、生きものとして生きるという生き方を許しません。しかも、多くの発信が東京からなので、社会としての価値観や生き方の選択が東京で決められてしまうことになります。北海道から沖縄までのさまざまな自然の中でそれを生かした暮らしを作っていくことが、「ヒト」としての豊かな暮らしにつながるのに、です。

地球儀の中で日本列島を眺めると、なんと自然に恵まれ、可能性に満ちた場所に私は生まれたのだらうと思えます。是非一度眺めてください。北緯四五度から二六度まで、北海道から沖縄までの自然は多様で美しく、資源に満ちています。世界六位の長さと言われる海岸線は、観光資源であると同時に豊かな海産物を提供してくれれます。中央には森林で覆われた山脈が並び、富士山は三七七六メートルの高さ、一方日本海溝は最も深い所で八〇二〇メートルの深さ、南北だけでなく《 c 》でも多様な自然を楽しめます。独立した島としての特徴を生かした国づくりを考えると、次々とアイディアが浮かぶ場です。

そんな呑気なことを言っているのは、現代の国際社会において立ち後れてしまうとと言われるでしょう。もちろん、国際社会の一員であることは重要ですが、グローバルであれと言って、そこで動いている政治や経済のみから生き方を決めていくことのほうが、もはや、後れた考え方だと思えます。そうでなく、この列島の「自然」にふさわしい生き方を考えたうえで、そこから世界に発信し、世界と交渉し、世界に学び、尊敬される国として存在していくことを考えられる、私たちの国はそんな豊かな地盤を

持った国だと思っのです。

⑤ とくに東日本大震災^{しんさい}を体験し、今後も太平洋プレート^{プレート}の動きは大型の地震の発生を予測させると言われる今、日本列島で上手に暮らしていく方策を考えるなら、生きものであることを実感できる、新しい豊かさを求めていくことが不可欠でしょう。

私は東京で生まれ東京で育ったのですが、この二〇年間大阪に職場を持ち、そこで活動してきました。その中で、一極集中のマイナスを感じたのですが、もつとも強く感じたことは、東京^⑥という場の特殊性^{とくせいせい}です。大阪には大阪の人々の暮らしがあり、文化があります。けれどもそこで起きていることはほとんど東京には伝わりません。大阪に異動になった新聞記者の友人は独自の活動を発信すると張り切っていました。数ヶ月後には東京へ戻^{もど}りたいと言いました。大事と思うことを書いても、全国版にはほとんど採用されないからです。札幌^{さっぽろ}や名古屋や福岡などでも恐らく同じ思いをしている人々がいるのでしよう。日本のどこに暮らしても東京の情報^{じょうほう}はテレビなどで知らされます。地方にいれば東京と自分の暮らす地域とを見る眼が持てます。一方、東京の人は東京しか知りません。B、それがすべてだと思っています。政治、経済、官庁、マスコミなどの中心がすべて東京にありますから、事はどうしても東京の眼で動きます。

生きものの基本は多様性であり、さまざまな視点があることです。「人間は生きもの」という考え方は、多様性を大事にしますので、さまざまな場にある自然、暮らし、文化が織りなす社会を求めます。その方が一極集中^{じゅうくしゅう}より柔軟性^{じゅうなんせい}があり、その結果強い社会になるかと思ひます。

日本の近代化は西欧からの科学を主とする知や社会制度の導入で始まったのですが、ヨーロッパなどいわゆる先進国とされる国は実は分散型であり、食べ物の自給もしています。世界のどこであれ、安全で美味^{おい}しく、良質の食べものを口にしようとするなら、身近で生産するという答^{こたえ}になるはずなのです。今後、土地、水などの不足と人口増加、経済成長が重なって食糧^{じょくりょう}不足^{じふそく}が心配される中での食べ物づくりの選択を考える時です。少なくともこのままでは、日本は先進国ではないと言わざるを得ません。社会制度や経済の専門家ではないのでこれ以上のことはわかりませんが、生命誌の立場から、一極集中は改めなければならぬと言ひます。

C、人間の特徴を生かし、経済や科学技術を生かして都市をつくっていくことは必要であり、野生の自然の中での暮らしを考えているわけではありません。

建築家の隈研吾くまけんごさんは、「場」という言葉を大事にしています。自然環境を生かしながらそこに最も適した人工物をつくっていくことで、豊かな人間生活ができるようにする。その場合、建造物の素材はその場に合った石であったり、木であったり、竹であったり……それに加えて、プラスチック、ガラス、コンクリートなども適材適所用いていくことで、豊かな「場」を創り出していくという考え方です。自然と無関係に画一的な都市をつくるのはやめようという提案です。そう考えると日本中に魅力的な街が生まれてくる姿が想像できます。

(中略)

近年、災害対策として首都東京の機能の一部を移転しようという議論に、私も委員の一人として参加しましたが、日本全体をイメージしてではなくあくまで東京中心の議論なので、栃木とちぎ県の那須なすに移そうという意見が主流になります。日本列島を見れば、楯田たえんに二つの中心があるように、南北または東西に離れた場に移転しなければバランスがとれないと考えるのが自然だと思っ
です。

実は、紙管を用いての建築で数々の国際賞を受賞している建築家、坂茂さかしげるさんと御一緒ごいっしょのシンポジウムで盛り上がった話があります。坂さんは阪神・淡路あわじ大震災以来、災害の起きた各地で紙管の仮設住宅を建設してこられました。東日本大震災でも活躍かつやく、紙管の仮設住宅は、多くの方にとっても喜ばれたと話してくださいました。

仮設 D 「仮のもの」はできるだけ早くそこを出るもの、出たいものというイメージです。しかし坂さんによれば、暮らす人たちの要望を聞き、それに合わせて建てるので、とても暮らしやすい、ずっとこの家でよいという声も出ているのです。そこから、長い時間もたせることを考えず、今の暮らしやすさを求めた仮設住宅のよさについて話し合っているうちに、都市だつて固定的に考えなくてもよいのではないかということになりました。そして「仮設首都」というアイデアが出てきました。しばらくの間は北海道、次いで九州などと動いたら、とても柔軟な国になるのではないかという話に会場から拍手はくしゅがわきました。首都は難しいにしても、国会を船にして移動させたらどうでしょう。議員は全国から集まっているのですから。そうなる
と数も考え直すことになるでしょう。バカげたことと言われそうですが、あれこれ考えると固定観念こうていくわんねんが薄うすれて行動が柔軟になります。

旅先でその土地の食べ物をいただくと幸せを感じます。そんな時、^⑦「ほんとうのしあわせ」ってこういうことだろうと思います。

テレビでも旅番組や土地の素材を使った料理番組がたくさんあり、皆その土地のよさを語りま^{みな}す。それを日常につなげていくことです。昔はそうだったではなく、現代の科学技術を活用すれば、基本的な生活の便利さと土地柄^{とちがら}を生かし、文化を生かすことを両立させることができるはずという二一世紀の新しい挑^{ちようせん}戦です。

(中村桂子『科学者が人間であること』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 本文中の [A] [D] にあてはまる語として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ語を二度用いないこととします。

- ア なぜなら イ しかし ウ もちろん エ つまり オ しかも

問二 ——線①「便利さはぜいたく気分へと移行した」とありますが、どのような意味ですか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 便利さよりも心の豊かさを願うようになった
イ 便利さを必要以上に求めるようになった
ウ 便利さを不必要なものだと考えるようになった
エ 便利さに慣れてむだづかいをするようになった

問三 本文中の《 a 》にあてはまる語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 心のぜいたく イ 時間のゆとり ウ 生活の便利さ エ お金の豊かさ

問四 ——線②「この方向での拡大を求めた」とありますが、これはどのようなことを指していますか。本文中の語句を用いて四十字以内で答えなさい。

問五 — 線③「手（ ）にかける」の（ ）にあてはまる一字を正しい漢字で答えなさい。

問六 — 線④「そうした生きものへのまなざし」とありますが、これはどのような「まなざし」ですか。本文中の言葉を用いて三十字以内で答えなさい。

問七 《b》にあてはまる語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 平等 イ 均一 ウ 規則 エ 正確

問八 《c》にあてはまる漢字二字の語句を答えなさい。

問九 — 線⑤「東日本大震災しんさいを体験し、今後も太平洋プレートプレートの動きは大型の地震の発生を予測させると言われる今、日本列島で上手に暮らしていく方策を考えるなら、生きものであることを実感できる、新しい豊かさを求めていくことが不可欠でしょう」とありますが、このような考えに基づいて実際に検討された具体的な意見を本文中から二十字以上二十五字以内で探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問十 — 線⑥「東京という場の特殊性とくしゅせい」とありますが、この「特殊性」とはどのようなことですか。本文中から五字以内で抜き出し答えなさい。

問十一 — 線⑦『ほんとうのしあわせ』ってこういうことだろう」とありますが、私たちが「ほんとうのしあわせ」を実感するためにはどうすればよいと筆者は考えていますか。四十字以内で答えなさい。

問十二 本文の内容としてあてはまるものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 明治維新^{いしん}以後、諸外国との外交が始まったことで、日本は先進国に追いつき便利で豊かな文明社会を拡大する努力をしてきた。

イ よりよく生きるためには、たとえ手間がかかったとしても、その時その時をじっくり味わおうとする姿勢が大切である。

ウ 日本の政治・経済の中心でありとあらゆるものが集中する東京では、東京の情報だけでなく、地方の情報も流れやすい。

エ 科学技術は大変便利である一方で環境破壊^{かんきょうはかい}などの問題を生み出したため、今後は進歩させることに慎重^{しんちょう}になるべきである。

オ 災害の多い日本で今後上手に生きるために求められるのは、地方の多様性に目を向け、生活のしかたを柔軟^{じゅうなん}に考えることである。

三次の——線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- 1 一打逆転のコウキ。
- 2 大雨でユウスイチがあふれてしまった。
- 3 シンピ的なできごと。
- 4 痛み止めの薬をシヨホウされる。
- 5 ハイカツリヨウをはかる。
- 6 費用はサイゲンなくかかりそうだ。
- 7 シュウイの様子を調べる。
- 8 温泉まんじゅうのガンソのお店。
- 9 火に油をソぐ。
- 10 長い伝統がタえる。

国

国語 解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一

問二 I

II

III

問三

問四

問五

問六 X

Y

問七

問八 (1)

問八

(2)

問九

問十

問十一

二問一

A

B

C

D

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

初め

終わり

問十一

問十二

三

9	5	1
ぐ		
10	6	2
える		
	7	3
	8	4

評	点

国

受 験 番 号
<input type="text"/>

氏 名
<input type="text"/>